HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会関係における人と機関
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	D016都市社会学原理　増補編関係
Relation	蔵内博士退官頌寿記念論文集 : 社会学における理論と実証
Issue Date	1963-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77324
Type	journal article
File Information	D016_01_Part6.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

およそ村落と村落との間の関係、村落と都市との間の関係、及び都市と都市との間の関係、すなわち広く聚落社会間の関係は、具体的には、甲の聚落社会の人が、機関の座からか機関の座をはなれてか、乙の聚落社会の機関の座にいる人か機関の座にいない人かに対する関係である。それは次の四類の関係に分類する事ができる。

一、人が人に対する関係
二、人が機関に対する関係
三、機関が人に対する関係
四、機関が機関に対する関係

笹森秀雄君の弘前市来訪者の来訪目的調査(昭和三十年四月調査)では来訪目的は米国のある社会学者等の社会関係類別の手法に従って personal の関係と impersonal の関係の二類に大きく分けてある(拙著『都市社会学原理』一〇五頁)。来訪目的は具体的には十九種に細分されてあるが、そのうち始めの五種類(1)公用 (2)社用 (3)商用 (4)自由業用務 (5)その他)が impersonal の目的で他の第六以下十四種類(6)通勤 (7)通学 (8)買い物 (9)映画その他の娯楽 (10)病院その他保健 (11)神仏詣 (12)親戚訪問 (13)友人訪問 (14)知人訪問 (15)病人見舞 (16)法要・墓参・婚葬 (17)海水浴・登山・慰安 (18)漂然と遊びに (19)帰省)が personal の関係となっている。前者が三〇%後者が七〇%である事が明らかにされているが、先に示した私の四分類の方法を用いればこの表は次の様に整理される。

最初の五種類の目的は私の分類における第三の形式(機関が人に対する関係)又は第四の形式(機関が機関に対する関係)に属するものである。私の分類の意図によって調査されていたならば第三と第四の別も明瞭に区別

する事ができた。又第六より第十一までの各項(6)通勤 (7)通学 (8)買い物 (9)映画その他の娯楽 (10)病院その他保健 (11)神仏詣)は私の四分類法における第二の関係(人が機関に対する関係)である。(12)親戚訪問 (13)友人訪問 (14)知人訪問 (15)病人見舞 (16)法要・墓参・婚葬 (19)帰省の各項は私の分類における第一の人が人に対する関係に属するものである。(17)海水浴・登山・慰安 (18)漂然と遊びに、の二項はあるいは社会関係には縁のないものであるかも知れぬ。もし縁がある事であればそれは当然第二の人が機関に対する関係に属するものと思われる。

右の整理から次の様な結果が出る。

第一形式(人が人に対する関係)に属するもの (12)—(16)(19)

第二形式(人が機関に対する関係)に属するもの (6)—(11)(17)(18)

第三形式(機関が人に対する関係)に属するもの

第四形式(機関が機関に対する関係)に属するもの (1)—(5)

弘前市に来訪した人のうち弘前市より上級都市であると思われる東京都と青森市からの来訪者達は、恐らく私の四分法による分類の第四の形式(機関が機関に対する関係)として来訪した人と分類第一の形式(人が人に対する関係)によって来訪した人達である事が鮮やかに明示されている。すなわち東京から弘前に来た人は上級官庁から下級官庁に公用で又は本店から支店に社用で来た人であるか、弘前にいる親戚の吉凶事などにかけつけて来た人であるかであることを教えている。けれどもこれらの上級都市から弘前にある機関に個人的な欲望充足のために来た人、すなわち人が機関に対する関係、すなわち私の分類法における第二形式のものは一人も存しない事が分る。personal, impersonal の二分法ではそれは明らかにされ得ない。

又弘前より下級都市の黒石や五所川原からは、弘前市内の機関を利用する人の来訪とそれらの下級都市にある下級機関より弘前にある上級機関に対する関係で来た人、例えばそれらの下級都市にある商店から弘前にある卸

売商店に所用あって来た人のある事が明らかであると共に、それらの都市より弘前にいる親戚や友人を訪ねて来た人のある事も物語っている。この事も関係二分法では現われてこない。

私が弘前駅での笹森君の調査を拙著『都市社会学原理』にとりあげたのは、直接には都市は社会的・文化的交流の結節点をなしている事、そしてそれは結果においてその活動が社会的・文化的交流の結節となっている様な機関が都市には集まっているからであって、それらの結節的機関をはなれては都市の結節的機能もないし、都市そのものの特性もそれらの機関の集合体である事以外にはあり得ないとみる私の理論をあの調査によっても吟味しようと思ったからである。

私の理解するところによれば都市は結節的機関の集合しているところである。都市をして都市たらしめているものはそこに存する結節的機関であるから、都市の大小は結節的機関の量の多少であって、人口量の大小とか人口稠密度の大小とか交通量の大小とか地価の高低や社会的流動性の多少等は結節的機関の多少に伴う随伴的現象に過ぎない。都市間の支配関係は機関の間の支配関係に過ぎない。

都市性都市度というものも都市に存する結節的機関の分化度や総量によってこそ測量さるべきものである。そんな訳で機関の研究は都市の研究の中枢部門をなすものである。しかし機関の研究は都市の研究の中枢部門ではあるが、決してその全体ではない。都市は機関が集まっているところには相違ないが、人が住んでいるところである事も又事実である。機関を増していくにつれて、都市性が増大していく。今日の都市は烈しく都市性を増している。それだけ機関が激増しているのである。けれども、どんなに激しく機関が増加しても人の住居が完全に無視された都市はかつて存しなかったし今からもあり得ない。都市のこの二元的性格すなわち機関の集合地としての性格と人の密居聚落としての性格とを併せ備えているところに都市の本来的な複雑さはある。

都市のこの二元的構成は、都市住民の一人一人の生活の中にもその通りに現われているようである。それは人

が人として生活している場面と人が機関として活動している場面との二つの質的に異った生活の型である。人が人として関係する人間関係と人が機関として関係する人間関係との全く異った二つの社会関係の型である。

弘前の調査には第三形式（機関が人に対する関係）と第四形式（機関が機関に対する関係）の別が考慮されていなかったため、調査された数はその合計を表わしているものである。けれども私のこの四分形式の方法によって調査すれば第二形式と第三形式は検別され得るものである。第一形式（人が人に対する形式）と第四形式（機関が機関に対する形式）との二分の形式だけであるなら、同類の分類形式は社会学には従来他にもいろいろ存している。皆同様の内容を異った角度からながめた集団類型二分法である。二分される二つの極限における大きな性格的区別は明白に認められるからであるが、しかしその中間における並存、両者の調和か混合か拮抗か、そんなものの現に存している存在形態を理解せしむる根拠には具体性乏しく、故に実証的研究の用具となり難い。二つの相容れざる性格の存在が主として言い放たれているだけの様である。

私の第二形式及び第三形式は右の中間的性格又は中間的形態を検出せしめ得る手懸りをつくっている様に思うのである。

第二形式も第三形式も共に機関と人との間の関係には相違ないが、その関係の端緒を作るのは何れの側であるか、その関係に対して何れの側が積極的であるかによってこの関係は二つの形式に別れている。農村の人が都市におもむくのは何を目あてに何を求めて行くか、都市の人が農村におもむくのは何を目あてに何を求めて行くのであるか。両者は用事の内容も心の構えも全く異っている。

都市生活における人間関係は、人が人に対するものか、人が機関に対するものか、によって大きく異っていると共に、人が機関の座からの関係か、機関の座をはなれての関係か、によってはなはだしく異った性格のものである。故に都市社会生活の理解のための分析の用具としてこの四分類法はいくらか役立ちうると思うのである。

80

又第二次的集団の中に発生する第一次的集団、ゲゼルシャフトの中に発生するゲマインシャフト、フォーマル集団の中でのインフォーマル集団の発生等に関する理解にも私は機関の考察によって実証的にその手懸りを得ようとしている。

(二)

都市で生活している者は毎日多くの人に接している。名前も素性も知らない人が多い。駅の出札係の人に銭を出して行く先の駅名を告げれば彼は無言でキップにおつりまで添えて渡す。改札係にキップを示せば彼は無言で改札してくれる。目的の駅に着き出口の改札係に無言のうちにキップを渡し外に出る。

デパートに入れば入口の案内係は歓迎の礼を示し、売り場の係りは必要以上でもなく以下でもない応答をもって客に接する。郵便局の窓口の係りの人も区役所の窓口の人も皆同じ様に必要な応答だけをする。皆機械の様に正確に必要な応答をしてくれるが、それは常に必要以上でもなく以下でもない。一台の正確な計算機の様である。事実キップの販売が自動式になっている機械もある。十円硬貨一枚を入れれば十円区間のキップや体重表示札やキャラメルが出てくる機械がある。けれども出札係や販売係や郵便局の窓口の係りは大部分人間が行っている。明らかに彼等は人間であって機械ではない。

私等はそれらのいろいろの係りの人々については彼等の名前も素性も知らないが、彼等の係りが何であるか、又その係りではどんな事柄が為されるかについては一通りは知っている。つまり私等が彼等に期待するものもあらかじめきまっている。それらの係りの人も私等が何故に彼等の前に現われたか何を彼等に要求しているかをよく知っている。改札係は私等が一人の旅客として改札を求めているのであって、それ以上の事を求めたりそれ以

81

下の事を求めているのではない事をよく知っている。私等が彼等を機械の様に感ずると同様に、彼等にも私等は機械によって次ぎ次ぎに処理される例えば脱穀機の中の穀粒の一つぶに過ぎないものに見えるのであろう。けれども、私等も彼等も明らかに人間同士である。機械がなしている仕事の全過程が全く定まっている様に、既に定まっている仕事の一組について私等は依頼者となり彼等は受諾者となるだけである。彼等は機械の向う側に立ち私等は機械のこちら側に立つだけである。機械の仕事の工程はちゃんときまっているのである。

私等は都市の生活では右の様な心のやりとりをする場合が日々少くない。少くないどころか、都市生活において私等が家の外で接する人はほとんど皆何かの係りの人であって、皆それぞれ機械の向う側にいる人達である。彼等の全部について言える事は彼等が皆私のいわゆる機関の座にある人であるという事である。

けれども都市の生活で私等が接する人間は、明らかに機械の向う側にいる人間ばかりではなく、都市生活にも恋愛もあり刎頸の交りもある事はたしかである。肉親の関係、師弟の関係には様々の感情が様々の形で動いている。都市生活の中にも愛憎の関係は存していないのでは決してない。

等しく人間の間の心のやりとりでありながら、例えばデパートの売り子と来客との関係と、その同一の売り子とその恋人や肉親との間の関係は全く別の世界での出来事である。この二つの別々の世界はどうして現われ得るのであろうか。多くの社会学者がそれについていろいろの見解を示しているが、それに対して私は、それは主として私のいわゆる機関の座についた場合と機関の座をはなれた場合の別にもとづくものであると見ているのである。前者は都市を都市たらしむる機関に関係し、後者は都市の聚落社会としての性質に関係をもつものと考えるのである。現実の都市生活にはこの二つの極端に異った型の世界とその中間の様々の型の世界が複雑混乱した生活を示している。都市生活のあるところでは甲の型の生活があり又あるところでは乙の生活の型がある。一人の個人の生活について言っても、ある時は甲の型又ある時は乙の型の生活をしている。甲の型はあくまで甲の型、乙の

型はあくまで乙の型である。それが矛盾なしに同じ時に同じ処で並存している。そこに問題がある。

私のこの見解は従来の社会哲学者等の社会的性格二分類説に比し具体性と実証性によって何よりも両者の中間的存在の理解に役立ち得る様に思うのである。

三

私の理解するところによれば都市をして都市たらしめているものは、そこに集まっている結節的機関である。聚落社会に結節的機関があればそれだけ都市性が存している。結節的機関とは国民社会内の社会的文化的交流の節目になる様な機能を果たしている社会的機関である。それはありのままの形では生業活動に外ならぬ。人が生業として運営している活動が結果において国民生活における物や心の社会的斉一化の現象に、結節の様な機能を演じている社会的機関となっているものを結節的機関というのである。この意味での機関は生業又は生業協力体として運営されているものである。社会的交流の結節に多くなる、ならぬは機関活動の結果において認められる事であって機関活動の直接の目標がそこにあるのではない。結節的機関が社会的交流の集合点又は分散点をなしているのはその機関の活動の結果であって目的ではない。商店は商品を販売する事を生業としているのであるが、その生業活動の結果は国民社会の中に物に附着した文化の斉一化をもたらす結節的機関となっている。

機関は一個人が生業として経営しているものもあるが、近代都市における結節的機関となっている機関は、数百人、数千人が協力して経営する生業協力体をなしている場合が多い。大規模の生業協力体を形成している機関においては、様々の部局が構成されいろいろの形の業務が行われている。けれどもその機関内の様々の活動の究極的な統一的目標は明白である。それはその機関が一体となって作り出す何かの社会的価値の生産である。デパ

83

ートも工場も官庁もパチンコ屋も皆それぞれ独自の社会的価値を生産している。今、私等が手近かに身辺で観察し得る事実では、機関で作り出された価値は国民社会の広場において評価され交易され、そのいろいろの交易の操作を経て機関の座にあるものは皆それぞれ生計を得る事ができる。というよりも、生計を得るために人は機関の座につく。機関が生業又は生業協力体といわれ得る訳である。

けれども機関が皆それぞれ何かの社会的価値の生産単位に名づけられうる事は何れの国民社会にも通じていえる事であるが、機関がその生産した価値を機関の名において直接交易の市場に出し、従業員の生計がそこから得られるとは一概にはいえない。統治文化の相違によって交易の意味も生業の意味も機関の機能の一半も根本的に異っている。

社会的価値生産単位としての機関の次のごとき特性は見過さるべきではない。

機関の規模が大であればあるだけ、そのメカニズムが円滑に回転して行くためには、より多くの部分が自動的に回転して行く事が必要であって、そのうちのどの一部分もそのメカニズムを混乱せしむる様な活動は排除される。故に大きな機関ではその部局のどんな末端の係りの仕事も厳格に規定され、その通りに運営する事が指示されている。機関の座にあるものは機関の指示に従って行う行動以外は禁ぜられ、指示に従う事だけが期待される。機関の規模が大であればあるだけ、その構造もメカニズムもより精密な組織をもっている。そのうちの各部局において機関の座についている者は、その大きな機関そのものの一部分となりそのメカニズムの一部として活動する。彼の活動は機関そのものの活動である。機関はその活動が一定の規準によって進められる事が公約されているものであり、機関に配置されている従業者は機関の運転を正調ならしむるだけの意味で配置されている機械の一部分に過ぎない。機関そのものの動きは一定の方法と一定の順序で自動的に進行しているものであるという事ができる。動き出した機関はその構造によって一定のメカニズムを追っていく。

機関の座にある人の活動は事務だという事ができる。事務という表現は規則に従って操作が進められていく事を意味する。誰が行っても同じ様な進行を辿るものである。感情がない事、個性がない事を特性としているので、彼がなす事は彼でなくてもできる事である。皆代行のできる仕事である。

機関の座にある人を単純に人と思ってはならぬ。彼は機関を運転する機械だというべきである。機関は動き出せば一定の順序で一定の様式で運転をつづける。機関は動いているか動いていないかの別があるだけであって、動き出せば動き方は常に一定である。それが公約されている機関である。

機関の座における人の作業は特に今日の都市にある大規模の機関においては各部局における作業は大きな流れ作業の中の一節として早く操作しなければ次の仕事が直ぐその後から追っかける様にやって来る。人は深く思慮する余裕ももたない。人は機械以上に精巧な機械として機械の一部分をなす機械でしかない。

都市の内にある様々の機関の活動を推し進めているのは間違いなくその従業員達である。けれども従業員が人というかどうかは問題である。事実、従業員は新しい機械によって次ぎ次ぎに代替されつつある。人間より安値な機械が発明され次第、その新しい機械は人間を駆逐して代行者となる。けれども機械が人に代行し得ない限界は明白である。機械は笑う事も泣く事もできない。けれども笑うことも泣く事も機関には必要のないことである。

四

機関が交易の単位をなしている国民社会では、都市に集まっている結節的機関は交易性の特に高い機関である。結節性は交易性追及の結果として生ずるものである。故に交易性こそ今日の我々の都市の機関の性格を基本的に

85

規定しているものである。そして都市の機関の性格が我々の都市生活そのものの基調をなしていると考えられる。

およそ交易は次のごとき関係を条件としていると認める事ができる。

一、交易は対等のAとBとの間に行われる。権力も暴力も又愛情もこの対等の関係を乱す事は許されないと思われている。

一、交易においてはAもBも共に自由に行動しているものである事を相互に認めなければならぬ。

一、交易はその時その場における厳格なる評価によって決定される。時と処の位置について厳正でなければならぬ。

一、交易の関係はAも希望しBも希望しなければならぬ。Aは自分が提供するaが、Bの提供するbより利用価が高いと認め、Bはbよりaが利用価が高いと認める時に交易は成立する。故に主観的には何れの側も交易によって己れを利していると信ずべきものである。

交易はAの欲するものとBの欲するものに差異があるから成立する。AとBの欲求するものの差異の上にのみ成立する。交易は当然に社会的異質の間に成立する。愛好するものの相違、所有するものの相違、欠乏するものの相違、富の量の相違などの間に成立する。

交易は相互利用であるが、対手Bの提供しうるbをAが自分の生活に利用せんとする願望の発動がこの関係の端緒となる。この関係の開始者となった者がBでなくAである事に注意すべきである。

交易は結局AがBを利用する事を端緒とする社会過程であるが、Aは受けるために与えるのであり、与えるために受けるのでは決してない。Bも与えるために受けるのでは決してなく、受けるために与えるのである。それが交易である。

誰が受ける事をより必要とし、より切実に感じていたか、そこに問題がある。恐らく、相手がもっている総て

のものをもっている者は交易の必要を感じないであろうし、何か不足するものがあればあるだけ、それに応じて交易を必要とするであろう。そうであるならば、当然に貧しい者ほど交易の必要を感ずる機会が多い。交易の必要をさし迫って感ずる者ほど、又さし迫って感ずる時ほど、その交易は常に不利の立場にある事を私等は日常の生活において明白に知っているが、それがどんなに、どの位不利であるかを論証する資料はここにはない。考えて見れば、それを論証する事は簡単な事ではない。私等の主観的な感じ方がそう思わせているに過ぎないのかも知れぬ。けれども事実その傾向がほんの少しでも存しているとしたら、それは大変な事である。

交易の発端者は相手の提供し得るものを得たいとより切実に感じている者であるが、彼は対手より常に不利の立場にあるという事が一般にいい得るのであるなら、原則的に貧しい者ほど交易を切望し、それだけ多く不利の立場にあるという事が一般にいい得るのである。

もしそうであるならば、交易は事実上対等の関係にあるのではない。又交易における自由は、一方の側では、不利に向い得る自由でしかない。しからば、交易は持てる者の持たざるものに対する静かなる掠奪だといえない事もない。それによって富者はいよいよ富み、貧者はいよいよ貧しくなるともいえない事はない。

交易の関係はそんな特性があるためにか、いろいろの無理な又悲惨な事態をも発生せしめ得るのであるから、不利な立場にある人々の悲劇は交易ごとに合法的に極限まで達し得る。承服の限界に達した時には乱暴な騒ぎも起り得るであろう。であるからか交易の制度は古い時代からその制度を擁護する強力な権威による保護が必要であった。今日では国家が法律と武力によってその必要に応じている。交易は合法的で最も合理的な人間協力の制度であると国民は皆信じさせられている。

交易の条件の合理性を国民は疑わないが、貧困になれば加速度的に貧困が増す事を誰も感知しているように思う。国民が生業の座や交易に対して過敏となり硬直した態度さえもたざるを得ないのはその為でもあろうか。そ

87

れが又都市の人の生活態度にもなっているのであろう。都市の庶民は貧乏になるまいと皆おののいている。けれども交易には右の様な性格も考えられ得るとしても、我々の都市はこれなくしては存続し得ないものであり、年の瀬を越し難い貧者には高利貸もありがたい生活の協力者である。

貧しい者が交易のために明白に不利な立場となり、そのために不幸が生じた様な場合でも、その不幸は当人の無能懶惰の報いと解され、誰も交易の制度そのものに疑いをもつ者はない。交易は合法的で合理的であると認める事には法律の秩序においても、私等の意識の世界においても、疑う余地はない。だから私等の都市生活が交易の上に安居している事は明白である。

五

機関の座にあるということは、機関に所属しているということとは別である。機関の座にあるということは機関のメカニズムに沿って行為する事であり、機関そのものの一部として行為している事である。ある機関に所属しながらその機関の座についていない事もある。

Aの友人BがBの所属する機関の中にAのために職場を世話した事がある。Bはその機関の座から世話したのではなく、友人として世話したのである。ところが話しがうまくゆかず、結局Bはその機関にあった彼自身の職場を失うことになったので、Aは非常に恐縮した事がある。機関の座から世話する事と友人として世話する事とは両立し得なかったのである。

機関の座にある時の人の心は、機関のメカニズムに沿っている心であり、それ以外の心は許されないのである。機関のメカニズムとは特定の社会的価値を生産してそれを国民社会の市場に出してできるだけ有利に交易する事

である。交易の原則が機関のメカニズムを貫いている。機関の座においては人はそれ以外の活動は禁じられている。人を援助するという事は機関のメカニズムのどこにもあり得ない。

機関は生業であるから交易の原則の上に立つものであるが、交易は人と人との相互利用の過程である。しかし機関は人を利用しようとはするが、利用されようとはしない。利用するために利用されるのであって、利用されるために利用するのでは決してない。

失業した者が友人に就職を依頼するのは友人を利用する事ではないのか。否、援助を求める心は交易における相互利用の心とは異っている。交易における利用は常に反対給付を考えているが、援助を求める心は反対給付を考えない一方的給付だけを予想している。

反対給付を予想しないで与えるのは恐らく愛というものであり、それに報ゆる心は恐らく道義の心というものである。愛と道義は明らかに人の心と人の心との直接のやりとりである。援助をたのむのも人の心であり、それに応ずるのも人の心である。

相互利用の原則の上にある機関の心は人の心に耳を傾ける心ではない。援助は人の心に耳を傾ける人の心がなし得る事である。友人に就職を依頼するのも人の心、それに応じて力となろうとするのも人の心である。人を利用する事のみ考える機関の心には人の心は聞えない。給付と反対給付のやり取りのうちに利を集めるのが機関の基本的態度であるからである。常に反対給付を考えている機関には一方的な給付である援助は考えられ得ない事である。

人の生活には生業の座にある時があるとともに、生業の座からはなれている時もある。けれども機関の座は常に生業の座である。

私等の生業の座は常に相互利用の原則の上にある。利己と打算はその行為基準を定位している。

89

およそ機関の座についていないときの人の心の活動は豊かな感情に左右されている点において機関の座にある人の心と明白に異っている。好悪愛憎の感情は機関の座についていない時の人の心にはその人なりにいつもつきまとっている。しかるに、かくのごとき感情は機関の座にある人の心には厳禁されている。機関の座についていない時の人の心が、人の本来のありのままの心の活動であるかどうかは明らかではないとしても、機関の座についている時の人の心はその機関のメカニズムに沿ってのみ動いている心の活動であって、人の心の強制された特殊の場合であるという事だけはたしかである。

昭昭三十五年度の芸術祭参加テレビ劇「傷痕」は一つの大きな会社における入社試験に関するものであるが、採用者は結局その会社のメカニズムに最も適合する人から選ばれた。選考を決定するその会社の幹部の人々の人としての善意が結局空しいものであった事をたくみに描き出している。

六

今日の都市における社会生活を強力に支配しているものは、主としてそこにある大きな機関の活動である。それらの機関は皆それぞれの目的のために活動している組織体であるが、さながら自動的に動いている精巧な機械の様である。それを構成しているのは明らかに人間であるが、一人一人の個人の力ではほとんど微動もせぬ大きな組織である事が多い。都市の住民は直接にか間接にか皆それらの機関のあるものに所属し、生業としてその運営のために働いているが、機関の座についている時のそれらの人々の生活は、機関そのものの活動以上ではない。機関は人を機材として用いている大きな機械であるからである。

又都市で生活するものは、機関の活動を利用する事なしには一日も生活を続けてゆく事はできない。食品もサ

ービスも水さえも、都市では人はことごとく機関を通して得ている。

かくて今日の都市生活は様々の機関の活動に皆が調子をあわせて営まれているという事ができる。

今日の都市にも、友人関係もあり、恋愛の関係や家族や親族の関係などもないではないけれども、仮りにそれらの個人的な関係が少しも存しないでも、人は都市では様々の機関に依存し利用するだけで充分に秩序ある生活をつづけて行く事ができる。一人の友人もなく、一人の家族も親族もいないでも、人は都市では様々の機関に依存し利用するだけで何の不自由もなく生きて行く事ができる。職場とベッドさえあれば結構楽しく生きてゆける。

これに対して村落では、生業もあり機関もあり交易もない訳ではないのであるが、生業は自給自足性多く、機関の規模は家族と等しく交易も少く結節性はほとんどない。村落では機関はほとんどなきに等しく、人と人との間の愛情や道義による協力のみが村の社会の秩序を守っている。村落は人の協力的組織以上ではない。

村落では村の人達の愛情の世界より孤立する事は耐え難い事である。かつて村落での極刑は村ハチブであった。村ハチブは村の人達が皆その人と交際しないという事ただそれだけであった。

かくて都市における社会生活を支配しているものは、主として人と人との間に存する媒体としての機関であり、機関における合理性である。村落における社会生活を支配しているものは主として村の人達の直接の心のやりとりであり、それを貫いているものは情義であるといえる。

およそ都市化の過程あるいは都市度上昇の過程としては、(1)聚落社会に結節的機関が増加して行く事、(2)結節的機関の増加に伴って面識なき人との社会関係が増加して行く事、(3)面識なき人との社会関係の増加に伴い社会関係が合理性を増していく事が考えられる（この都市化の過程は村落社会のない国民社会には当然にない）。

本来結節的機関そのものが自給自足性を欠くものであるから、結節的機関の増加はそれだけ自足自給性の減少と交易活動の増大を伴うのである。又一方結節的機関の増加は非面識者との社会関係の増加をきたす。故に交易

活動の増大と非面識者との社会関係の増加は平行して進む。この平行する進行のうちに合理化は当然に進むものと思われる。機関の発生と増加が都市化の現象における中核である事が理解される。

具体的にいえば、純村落の上に結節的機関が加わって都市的となり、結節的機関が増大していくに従って都市性が増していき、都市度の最も高い大都市に達するまで結節的機関の増加はつづけられ都市化は進行すると見られるのである。一方の極が大都市であり、他方の極が純村落である。その中間に様々の段階の都市的存在がある。純村落より大都市に至る様々の段階を区分する指標は、何よりもそこに見られる結節的機関の量である。そして、それらの各段階を通じて認められるものは聚落社会としての基本的性格である。けれども聚落社会としての機能も都市化の上昇と共に明らかに変質していく。共同防衛の機能が都市化と共に合理化を進めている事情を確認する事は比較的容易であるが、生活協力の機能が都市化と共に合理化を進める事情を確認するためには、もっと複雑な論証が必要である。

村落における生活協力が愛情と道義をもととするものであるのに対して、都市における生活協力が打算と合理を基とする交易の過程によるものであると見る見解、別言すれば、村落社会の日々の生活の秩序は道義と愛情の静かなる協力の上に、そして都市の生活の秩序は打算と合理の冷厳なる平衡の上に維持されていると見る理解には誤りはないと思われるが、しかしその中間的存在は如何にして可能であるか。まさに質的に異ったこれらの二つの拮抗的性格の社会の中間に存する様々の段階の存在はどんな形で構成され発展しているのであるか。それは水と油の中間的存在に比すべきものではない事だけは明らかである。

私が今ここで問題とする中間的存在は純村落と大都市の中間に存する聚落社会の中に認められ得ると共に、純村落の中にも大都市の中にも認められ得る中間的存在である。

大都市の中に見られる情義の関係の成立は如何に理解さるべきであるか。純村落の中に見られる合理的協力の

関係の成立は如何に理解さるべきであるか。中間的存在の理解はそれにも答え得なければならぬ。

都市での人の心は主として機関の座にある人の心、それは計算器の心、合理と打算をもととしている心、都市では機関の関係が多いので都市生活に支配的に存する心は計算機の心である。

村落での人の心は機関の座についていない場合の人の心、面識者間の全人格的な結合における人の心、愛情と道義をもととしている心である。

けれども都市にも村落的な世界があり、村落にも都市的な世界がある事は事実である。

都市の職場に見られるインフォーマルなスモール・グループと都市の住宅街に見られる自然近隣とは都市のうちに見られる村落的世界である。どんなに都市化が進んでも存続するであろうと思われる村落的世界である。都市の砂漠の中に生きつづけている小さな村落の叢である。そこには村落における様な持続的・反覆的結合が存しているからそんな村落的世界があり得るのであり、今の都市生活ではそんな関係が外にはほとんど見られないから、外にはそんな世界は現われ得ないのであろうという社会学的な説明は一応正当の様に見える。

けれども村落における都市的な世界の存在が同一の原理からは説明され得ない事は明らかである。

村落は愛情と道義が秩序を与えてきた世界であるが、しかしこの人間性豊かな世界にも冷厳なる交易の原理の上に立っている関係が久しい以前から存してきた。講とユイがそれである。

日本の講と朝鮮の契と中国の合会は、ほとんど同一の組織と機能をもつものである。中国の合会は唐時代に既に存していたものといわれている。合理的な集財協力の慣行として革命前の中国に存していたが、華僑には今も存している。

日本のユイと朝鮮のプマシと中国のパンクンもその組織も方法もほとんど同一である。これは労力交換の合理的な冷厳な協力制度である。これもはなはだ古くからの慣行の様である。

講はものに関し、ユイは労力に関している。都市で生業として交易されるものも結局はものか労力以外にはない。それは明らかに生活の経済的基礎である。

およそ生活の経済的基礎に関係ある協力すなわち生業に関係ある協力は、人と人との間のあらゆる協力の型の中で特別に合理化されている唯一つの協力の型ではないのか。この型の協力に関係ない人間の協力はみな情義の支配にまかされているのではないのか。その点が充分に明らかになったならば、都市的社会の特性についても村落的社会の特性についてもその中間的社会の存在についても容易に説明し得る様に思うのである。

村落では、その内部において物や労力の交易の機会が少いから情義による協力の場合が多いが、物か労力による協力の関係の必要が生じた場合には、村落の社会でも直ちに冷厳な合理性が今も抬頭しているし古くからも抬頭していたのではないのか。

都市生活では、交易に無関係の人間関係は珍しい。そんな関係は都会生活の大海の中の珍しい平和な小島である。インフォーマルな小集団も自然近隣も、生業活動のリズムから離れて造られるから情義の小天地となるのである。持続的・反覆的結合が見られるからのみでは決してないのであろう。

最後に一言、人の生活には愛情と合理は都市においても村落においても紙一重をへだてて生きている。愛情だけでも生きられないし、合理だけでも生きられぬ事を人は今も昔も知りぬいている。冷厳な合理はせめて生業関係だけにとどめたいというのが人間の古くからの悲願ではないのか。そこに人間の社会関係を大きく二類に分つ直接の根拠もあるのではないのか。生業関係のものとその他のものに。